激化する世界危機を
プロレタリア日本革命へ
日本革命をアジア革命の勝利と
世界革命の突破口とせよ！

前衛

毎月1日発行
発行 「前衛」編集委員会
発行人 高橋一雄
連絡先 振替「東京44589番前衛社」
千代田区飯田橋3—1—6飯田町ビル
前衛社 TEL (264) 5079
購読料（〒共） 1部 50円 12回 500円

反戦・反安保・反帝国主義政策の
反政府実力闘争をのりこえ
工場占拠・二重権力・武装蜂起
・帝国主義打倒の革命闘争へ

ふたたび火を噴く立正大

右翼・暴力職員の壁を恒常的に
突き崩し立正大を南部労学
底辺委員会運動の拠点とせよ！

立正大を根底から揺るがした七〇年立正大闘争は、六八、六九年の全国学園闘争がロック・アウシュヴィッツ体制の前に敗北し、六九年安保階級決戦敗北以降の後退局面にあって、支配階級が追撃戦として実質化していた反戦派労働者への処分弾圧（レッドパージ）と学園における私学一斉学費値上げ攻撃を受けとめ、バリなきバリケード闘争として展開せしめた

われわれは、七〇年闘争が立正大右翼支配体制そのものを突き崩し恒常的に革命派の力によって資本主義的教育秩序そのものをマヒさせて行くものとし、そしてその闘いが自らの攻撃的でダイナミックな展開を通して、われわれの側から地区に突出して行き、付近の学園工場職場に闘いを波及することも追求した。

だが、最高五〇名のゲバルト部隊を有したダイナミックな運動は、その力の蓄積を一気に右翼セン滅として爆発する局面を二度まで持ち得たにもかかわらず、権力当局の介入、暴力的敵対の前に敗北していった。

われわれはもっとも先頭で闘って来たものとして、①七〇年闘争の中で明確に組織された右翼職員＝学内機動隊と、国家権力の臨戦体制、直接介入に象徴される学園ロック・アウシュヴィッツ体制そのものを突破する権力闘争を展開すること、またそれを組織する中核的組織を構築しなければならない ②右翼職員・ガードマン粉砕、資本主義的教育秩序解体闘争を構築し貫徹する為には、学生の利害を統一的に象徴する現実的課題を軸に、個々の矛盾に対し闘いを追求する諸闘争委の広範な結集と、全体として、又それぞれが資本主義的教育秩序＝授業、試験(単位、卒業)に対し、教官と学生という非和解的関係をふまえ、計画的に様々の段階、戦術を駆使し闘いぬく中に初めて全学的流動化を克ち取れること、その上に立って強固な武装部隊とそれを支える広範な大衆の下に、有利に右翼、職員ガードマン、国家権力に対する攻撃を恒常的に貫徹出来ること、③同時にその闘いを、工場職場反乱を追求する労働者本隊と結合させる運動として準備、計画化し、当初から実体的に、学生の独自任務、労働者との統一行動、労学の統一集団組織を作って行かなければならないこと、以上の三点を七〇年立正大闘争、日大、東大全共闘運動の教訓として、まさにわれわれの原点として七一年以降の闘いを展開して来た。

学館ロックアウトをめぐる
文団連運動の成果

七一年一月「暴力学生の温床云々」によって学生会館がロックアウトされ、それに続き七二年二月当局主催の「学館懇談会」をもっての御用運営委のデッチ上げ—学館開館策動に対し闘いを開始した

闘いは七〇年当時の旧活動家を中心とした文団連準備会による「懇談会」＝御用運営委のデッチ上げ粉砕、体育会、民青の当局とのボス交粉砕闘争として克ち取っていった。と同時に、われわれは四月以降学館ロックアウトを全学的に暴露し、情宣し、当局と一定程度対持して行くものとして、文団連の結成を準備した。それは文団連運動の一定の展開の中に、当局の学生監視弾圧体制に対し、鋭く全存在をかけ非和解的に闘いぬく闘争体を準備し、文団連、クラス、サークル等に根を持ち、それらに支えられた運動実体を構築するものとして準備していった。

四月以降の闘いは、四・二四文団連結成、五・四から文団連議長の無期限学館前泊り込みの開始、学生部追求、五・三一文団連集会（三〇〇名）、一年生の授業への介入の計画的貫徹、六・一六泊り込み拡大強化（一五名）、六・二二告示通告に対する反撃、六・二四抗議集会（一〇〇名）、学生部、学長に対する追及を展開した。

この間の文団連結集基軸を、①学館ロック粉砕、②学館自主管理自主運営、③当局に対するサークルとしての届け出制粉砕、④右翼民青のボス交粉砕、⑤学館に関する団交要求、の五点とし、文団連事務局と活動家という関係上に運動を展開して来た。

われわれは文団連運動の成果をはっきり確認しなければならない ①泊り込み、泊り込み拡大強化、学生部追及等の徹底した闘争によって、当局の泊り込み妨害、「告示」「通告」体制を引き出したこと。②それに対し、当初文団連運動として、サークル員、一般学生を結集させ、そして六・二四にあっては、二年学館解放行動委(準)その他サークル員以外の結集を克ち取ったこと、又、一、二年を中心とした新しい部分が中心であること。③運動上において、学館ロックアウト、文団連に対する「告示」「通告」攻撃をめぐって、全学的問題として流動をつくり出したこと、以上が確認出来るだろう

だが、限界として総括しなければならないことは、文団連運動として闘いを表出させ、その有効な煮つめが決定的に遅れ、焦点がずれ、運動上における全学的流動化をもっての学館問題をめぐる文団連運動の横への拡大、クラス、ゼミ等の主体的結集を定着化し得ない点にあり、すなわち、運動構造一般の問題以上に、運動全体の質的転換をもった拡大として克ち取れていない点にあることを主体的に総括しなければならない。

全学的規模での闘いを
計画化せよ

われわれのロック・アウシュビイッツ体制打倒の闘いはようやく出発した段階にある。学内支配体制が、執行部への権力の集中、学生監視弾圧組織としての学生部の転換、その実力部隊—暴力職員の組織化として定着し、固定化している。そして当局は、今だ四〇億に及ぶ負債をかかえた極怪的火の車であることを平然と宣言している。それを学生に転嫁させることは七〇年学費値上げをみても自明の理である。学園では暴力支配、学費攻撃、一歩社会へ出れば公共料金値上げ、物価値上げ、その他諸々の攻撃と搾取と抑圧がある。労働者にとっては国鉄の「マル生」に象徴されるように、職場そのものでの労働強化、合理化がドラスチックに展開されている

われわれの闘いは社会悪、政治悪一般の問題に還元しない。資本主義体制とその維持執行機関＝手先きとの熾烈な闘いを展開して来た

その一貫としての現在の闘いを踏まえ、立正大闘争を発展させていかなければならない。

われわれは、前期文団連運動の上に立って、次なる主体的準備をしなければならない。前期の闘いが主観的意図とは別に自然成長的に流され、当局との対決の時期にそれを保証しうる明確な部隊が未成熟であり、運動全体に流れるダイナミズムの欠落を克服しなければならない。

その第一は形式的全体会議の招請でも、初めから形骸化した全学闘争組織でもない。明確な結集軸と運動実体をもった組織内容をもつこと、右翼、暴力職員を包囲する運動を前期文団連運動の上に、クラス・ゼミに定着させるための準備を開始すること、第二に、その闘いそのものが、当局と、闘う部分と闘いを支える学生大衆との力関係をみきわめつつ進むこと、それは当然にも武装部隊としての質をもつことであり、強固な組織をもつことである。一つ一つの当局との対決の内に武装出来得る組織を作って行かなければならない。それは攻撃する為の、攻撃を内的に確認し得る部隊であることである。又それは、武装対決を準備、計画化することである。第三に九月以降は、全学的につめの中に公然とした一切の運動を保証し、統括する部隊の場を克ち取らねばならない。

立正大闘争を労学底辺委員会
運動として定着させよ

全都、全国の労働者学生諸君。

われわれは七〇年闘争の教訓に立ち、学園での闘いを労学底辺委員会運動として展開して来た。それは、明学大の革命的学友諸君とともに、全遞各局に対するビラ入れを一年以上にわたって展開して来た。まさにその成果として、われわれの存在を、職制との攻防の中に、労働者の中に定着させ、労働者が学生に対しもつ偏見をも突破し、信頼を克ち取って来た。まさに、その運動はそれにとどまるものではない。

そして立正大Ⅱ部においても、Ⅱ部勤労学生諸君内部に、その位置を鮮明にし、工場労研運動を提起して来た。

われわれは、立正大が京浜工場地帯に位置していることを自覚しその歴史的偉大な任務を具体化させ、現実的に展開して行くことを先進的労働者学生諸君に宣言する

共産主義武装行動委員会立正大班

学園反乱・工場占拠—ソビエト蜂起
政治集会を貫徹！

全都、全国の兄弟！

この間の『前衛』でも明らかな様に、七二年一月党員協議会以降我々は、総力を挙げた工場工作による工場闘争、職場闘争の組織化と、それをとおしてその指導的中核となる地区党建設を押し進めてきた。そして、その一環として、全国反乱闘争を追及してきたであろう。

こうした工場闘争—ソビエト運動の本格的な開始と現局面の戦略的組織としての地区労学行動委連合、底辺委運動—を軸として、それに合流する全国反乱の追求の中で我々は多様なる課題のもとにいっそう広範な学生大衆のダイナミズムを呼びさまし、結集するために共産主義武装行動委とともに闘う大衆組織の建設の問題を現下の緊急の任務に設定したのである

じっさい『前衛』の下に結集する共産主義武装行動委の二年間にわたる実践は、①一月党員協議会以降の組織体制—実践的任務を遂行する力を保障したが、②今年に入ってから、ソビエト運動の戦略的一翼を担う指導組織としてのみずからの位置を規約作成をとおして明確にし、③わけても、学園反乱の基本戦略を統一戦線戦術と党派闘争としてより一層具体化し、④我々による情況に応じた主動的で柔軟な統一戦線戦術の駆使によってより広範な大衆を反乱闘争へ組織することを明確にしてきた。⑤そしてそれはとりもなおさず組織的には我々とともに闘ってきた多様な活動家兄弟たちを共産主義武装行動委とは区別された統一的な大衆組織に結合し、組織することを急務としていることに他ならない。

本政治集会は、四月以降、我々とともに闘ってきた兄弟達を首都圏行動戦線に総結集すべく、その第一歩として、準備会の呼びかけにより七〇余名の結集をもって開かれたのである。

まず始めに、本政治集会の司会から、①七〇年—七一年全国的学費闘争が、不発に終わらざるを得ない主体的情況を日共＝民青、革マル、新左翼諸派の破産として訴え、②それを突破する闘いの方向を明確にしその任務を全ての兄弟が担うという不退転の決意を固める集会であることが宣言された

そして、成島道官氏から「日本革命の戦略高地＝工場闘争の現局面」と題して、現局面の労働運動の特徴、戦後、四五〜五五年の十年間の労働者階級の闘いの意味、革命的労働者の闘いへの学生の合流の呼びかけの三点が訴えられた

とりわけ、氏のつぎのような呼びかけ—「戦後の学生運動は労働者との結合を学習会、街頭政治集会、デモでしかやったことはなく真の意味で革命的労働者と学生が結合したことはない」は、革命的労働者の潮流と合流し、ソビエト運動をともに切り開こうという宣言とともに圧倒的な拍手で確認された。

次いで、『前衛』編集委の樋村乃介氏が、「世界階級闘争の現局面」と題して発言し、北ベェトナムの労働党の指導による大攻勢が人民戦争の新しい地平の展開としてあることが、中国指導部の限界ゲバラ路線の破産とともに強調された。

最後に、首都圏行動戦線準備会代表のアッピールとこの間の闘争を通して、行動戦線結成準備を推進している兄弟達からのアッピールで集会は幕を閉じた。

代表アピールはつぎのように訴えた。革命的労働者の潮流とともに、①破産した反戦、反安保、反政府街頭カンパニア闘争にしがみつく新旧左翼が、現下の学費攻撃の前に屈服している。それは、現下の学費攻撃が、この間我々が実践してきた闘いの質、ロック—アウシュビッツ体制に立ち向かう闘いの質を要求しているからで、この攻撃、弾圧を唯一突破しうるのは我々だけであり、学園人民闘争の計画的遂行以外にありえない。そして七〇年代の学園における攻撃と弾圧を突破し、その闘いのなかから、工作者戦士を続々養成しながら、それ自身ソビエト運動の一翼たりうる闘いこそ、恒常的学園反乱の創出であり、それを可能にする戦こそ、学園人民戦争であり、それを支えるものこそ、人民戦争の三結合—主力軍、地方軍、民兵である。われわれは学園に於いて民兵的機能を持つ組織を行動戦線として形成しなければならない。

全都、全国の大学、高校で闘い抜いている兄弟達！

我々は、工場占拠ゼネスト—二重権力—武装蜂起、労働者権力樹立の権力闘争を直接的に準備する闘いに決起せよ。

それは、流動制圧戦と学園人民戦争の相互的過程としての恒常的学園反乱情況を創出し、工場工作工場闘争に合流する以外にはない言いかえれるならば、工場工作、労働者行動委運動を主軸とする学園支配の解体へ向けた管理支配秩序の連続的麻痺、攪乱と、工場闘争への工作戦士の育成放出の力強い流れの形成である。それは、具体的に学長、学部長を中心とする反動教職員の攻撃と弾圧の執行力に対する追及、追放の闘争としてまた更なる執行部の弾圧力行使—ガードマンやロック機動隊の出動—に対する学園人民戦争戦術の駆使による迎撃戦であろう。

この学園人民戦争への過程は、我々の統一戦線戦術と多重多様な任務（基本戦略の下に情勢に応じて創意工夫し設定する）の大衆的遂行という政治力＝工作能力によってはじめて学園全体をゆるがすその深さと拡さを持つ。

兄弟達！

共産主義武装行動委の下、行動戦線結成を勝ち取れ！行動戦線に結集し人民戦争の歴史的教訓を学び自からを人民戦争戦士として鍛えんことを決意せよ！

京浜労働者は南部底辺委員会に結集し、「工場占拠」に向けて統一戦線をつくり、強力な革命潮流を築き上げよう!!

第一章　南部底辺委員会の発展
第一節　南部底辺委員会の発足、第二節日本労働運動の転換、第三節底辺委員会運動の発展

第二章　戦後世界の破局と新しい労働者人民の闘い
第一節　戦後世界の破局、第二節帝国主義支配階級の混乱と激化する攻撃、第三節日本的労働運動の破綻と新たなるたい動

第三章　われわれの課題
第一節　工場職場闘争を革命的権力闘争として闘いぬこう
第二節京浜労働者は南部底辺委員会に結集し、「工場占拠」に向けて統一戦線をつくり、強力な革命潮流を築き上げよう

首都をゆるがす布陣の形成へ向け
さらに組織化をおし進めよ!!

北西部労学集会報告

同志諸君！闘う兄弟たち！

わが北西戦線は、吹き荒ぶ日本帝国主義の合理化の嵐に抗し、「合理化粉砕、職制支配秩序解体を工場占拠へ！」と、着々と布陣を形成している。

ニクソン・ショックを契機に、昨年度末から大々的に打ち出された支配階級の首切り合理化、工場閉鎖集約化攻撃に対し、既成左翼新左翼は、無力性を満天下にさらすことしか行いえなかった。支配階級の非妥協的攻撃の前に組合主義的闘争は、今や実に無力であるばかりでない。それは労働者人民の重い足カセとなり、更には、人民内部に虚無感を発生させるのに「貢献」しうるにすぎぬ。

組合主義のしがらみの内で、多くの青年労働者は、戦闘的に闘ったものほど、闘いから距離をおき無展望の暗やみに沈み込んでいる

我々は、こうした現状を突破し資本の恐らつな労働者攻撃と真に闘いうる道を提示せねばならない

志村化工の第二次合理化案等に見られる如く、資本はもう一段攻撃を強めてきている。無力な組合主義的「抵抗」に味をしめている資本家どもは、ここぞとばかりに労働者を骨ぬきにすべく、ますます策動を強めてきている。

かかる支配者どもの悪だくみと一刻も早く、四つに組んで闘える布陣を打ち固めるべく、われわれは、われわれ自身の飛躍を闘いとるであろう。

労働者権力樹立へ向けた、正しい路線に裏うちされた具体的な方針と、それを計画し、実践し、真剣な反省の上にたって進撃を保証する戦闘共同体の社会的登場をもって、絶望を希望へと組織する者こそ、われわれでなければならぬ。

こうした決意をさらに強固にし互いの実践から学ぶために、六月下旬、地区労働者学生討論集会をもった。

行動委運動の現段階と
我々の教訓

集会は、二つの基調報告で始まった。

〈第一報告〉「行動委員会運動の現段階と我々の教訓」

英雄的ベトナム人民を先頭にするインドシナ解放革命戦争は、「すべての人民が兵士！すべての村が要塞！すべてを前線へ！」と、人民戦争の創造的展開によって、主動性を堅持し、「百戦百勝の旗」の下、自信に満ちあふれ米帝をふるえあがらせている我々は、この革命戦争から多くのものを真剣に学び、先進国人民戦争の途を切り開かねばならない。

では、先進国階級闘争はどうかフランス「五月」イタリア「熱い秋」、日本の全共闘運動の示した闘いの道の意義は巨大である。

その後、新しい波は確かにあるイタリアの工場評議会運動、フランスの反組合主義潮流の職場反乱として胎動している。

日本では、春闘に見られる下部からの突き上げとして表現されているが、しかし組合内反対派、対官僚不満派から一歩も脱けでれずにとどまっている。

では、先進国での闘いに、何が不足しているのか。

あきらかに「工場占拠、学園占拠」に起ち上った人民大衆をひきいて、その闘いを発展させ、占拠武装から蜂起を現実のものとしうる組織と運動である。ところが、既成指導部と新左翼は、権力、資本のはげしい攻撃と、それへの大衆の怒りに直面し、前者は逃げの対応、後者はそれへの突き上げか又は衝動的反撃しか行いえない。

我々は、一切の障害物をはねのけつつ、生かしうる力を全て結集していく闘いを組織せねばならない。

この間の我々の闘いの教訓として、三点をあげておこう。

①全ての闘いを、ストライキ戦術—組合主義的闘いから解放しよう。

組合運動はせまい土俵での闘いであり、更に、大衆の闘いは、多かれ少なかれ交渉の圧力手段へと転落させられる。かかる形骸化し形式化した「闘い」から解放されて始めて受け身にのめりこまない戦闘を実現できる。

②行動委を軸に、あらゆる戦術を駆使し、創造的に闘おう。

敵の支配の強さと弱さを冷酷につかみとり、大衆の意識を把みとり、我々の闘いと組織化を強める戦術を創造的に生みだし、これらの闘いを通じて、行動委を強化し大衆と密着してこそ、敵に指一本触れさせぬ闘いへと向かうことができる。

③闘いの計画性と反省こそ「闘えば闘うほど強くなる」組織を作る。

闘いには計画性をもってのぞまねばならない。冷静な計画こそが闘いを前進させる。そして、その計画と闘いの反省を通じて、より以上の組織化、強化がなされる。

〈第二報告〉「R闘争の教訓」

40年夏、「職場闘争」「大衆闘争」「実力闘争」をスローガンに徹底した戦闘的組合闘争として始ったR闘争は、資本の非妥協的攻撃の前に無力化しはじめ、それに対し「世直し一揆」8日半ストをぶち抜いた。更に、夏季一時金の無期限ストを本社押しかけ、職制つるし上げとして闘った。だが、「ロック、二組、処分」攻撃により、組合闘争は危機へと追いこまれていった。

こうした行いを打開すべく、第一期の行動委運動が提起され、街頭で逮捕された反戦派への処分弾圧粉砕闘争を軸に闘った。

職制をして、「あいつら本当に殺ずかもしれない」と震え上らせた職制追放、営業所制圧の闘いはしかし、組合主義的運動の延長上にある急進主義であり、受け身の闘いの限界を脱し切れなかった。

六五年を契機とする三菱の自販体制の再編—全面的整備の突破口としてあったRの闘いは、「日の丸と君が代」の労働運動しかなかった自販労働者の合理化再編に抗する偉大な闘いであったが、しかしその未熟さは、その戦闘性にもかかわらず、権力の介入の前に一頓挫した。我々は、この血の教訓を充分に生かしきる必要がある。

熱気のこもった討論

二つの報告を踏まえ、討論に入り、各戦線からの報告が相ついだいくつか記そう。

〈I中小工場の行動委〉資本の解雇弾圧に対し、処分時の数倍の組織化で応えてきた。資本を根底から揺さぶり、絶望のドン底へたたき込む闘いの布陣を形成しつつある。我々の反攻は、第三段階へと踏みこまねばならない。

反攻の第一段は、断固たる解雇撤回闘争であり、それを軸とし、パンフ（内外の人間による）等を利用した「初歩的組織化であったこうした中で、内部の秘密ビラ、ステハリをも行いつつ、工場内部の核づくりをすすめてきた。

反攻の第二段は、パンフ、ビラ—職場新聞へと発展させつつ、〇〇名の労働者グループの組織化へとすすんだ。行動委と彼らの共同により、非公然に、あらゆる手段で要求をぶつけ、秘密の大規模なビラ、ステッカー等で、職場支配秩序の攪乱は開始されている。

資本は、「組合を作りたければ作れ」と、悲鳴をあげはじめている。得体のしれぬ、多くの「ゲリラ」より、彼らは組合を選びたいというのだ。

配転、首切りと、弾圧をくらうたびに、それを上回る組織化で応えてきた我々は、恒常的職場反乱の陣型を固くつくり上げることをもって、この泣き言に応えるべくがんばり抜く。

〈鉄工場工作者〉職制と下層労働者のケンカがあった。それは、仕事上の差別、職制の強権的支配への怒りに他ならず、それへの方針と、労災、生産性向上運動への方針をとおして最下層労働者の秘密グループとしての組織化に着手している。

〈A学園〉当局の腐敗した経営と大衆からの薄汚ない収奪に対し徹底的な調査活動で工作を開始した。周到なアンケート活動によりほぼその全貌を明らかにした。その成果をもって、クラス介入を行い、管理者—教授との論争—追及—さらに極反動教授にはすでに追放をも開始している。

〈T大学〉昨年の五波のストライキ闘争の破産、圧力—交渉闘争の破産を明確に突き出し、新たな展望の下、権力闘争派を中心とする革命的統一戦線が形成された。

三項目要求、自治会主義との決別、授業を基礎とする闘いの一致をもって、右派をけちらし前進している。我々は、更にあみの目の如くに統一戦線をはりめぐらし、その指導部として、けん引し抜く

更に、J行動委、臨時労働者の闘いの報告等、熱烈かつ、具体的な提起を受け、最後に一同志のまとめが提出された。

①徹底的な調査活動の意義を確認しよう。矛盾を具体的につかみとること、これがあって始めて、大衆と密着した闘いもできれば、敵の弱点を鋭くつくこともできるこれらは、創造的で生き生きとした闘いを可能にする。

②組合的戦術はせまい土俵での勝負である。交渉のための圧力闘争は、本気になった敵の前に、必然的に敗北していく。これでは「闘えば闘うほど強くなる」組織的闘いはできない。二重、三重の組織化を含んだ計画的、組織的、弾力的な方針をもって、我々は自らの手に主導権をもつことができる

③こうした計画と実践の、真剣で組織的な反省があって、更に前進できる。不充分な成果しか挙げられなかったとしたら、何が欠けていたのか。最初の計画は？遂行上の問題は？、問題点をあいまいにせず、真検に反省してこそ、我々は「闘えば闘うほど強くなる」ことができる。

こうした点が、立派にやりとげられれば、我々は資本を食い、それを栄養として、ますます成長できるであろう。

以上、われわれの集会は、終始緊張した中で、密集した成果をかちとった。

同志諸君！闘う兄弟たち！

わが北西戦線は、一刻も早く地区をゆらがす戦闘の布陣を打ち固め、人民戦争の中核体となるべく行軍を続けている。

手を携え、共に歩まん。

北西地区行動
委員会連合

6・18集会の圧倒的成功をふまえ
高校戦線の指導部を確立せよ！

京浜地区行動委連合・高校戦線

6・18シンポジウムの意義

全ての同志諸君！

K高校における「6・18シンポジウム」は、高校生、学生、労働者の結集のもと圧倒的に勝ちとられた。

われわれは、昨年、はじめてK高校において、労働者、学生との結合のもとに「シンポジウム」を実行し、京浜地区における高校生運動の指導部として登場した。

そして、そこにおいて結集した全ての高校生に対し「工場占拠闘争」を真正面から打ち出したのだ

それは文字通り、六九年高校全共闘運動の敗北以降、低迷をつづける高校生運動の新たな任務をさし示したものである。

しかしながら他面、この昨年のシンポジウムでは高校生運動そのものの運動論が鮮明とはならず、「工場占拠闘争」と「高校闘争が切り離されて語られてしまった」という限界があったといえる。

その意味で、われわれは、今年は、昨年からの高校闘争の成果をふまえて、それを主軸としつつ、工場闘争との結合をはかる「シンポジウム」をめざしたのだ。

われわれは、昨年K高校を基軸に高校行動委運動を展開し、前進してきた。そして今年は、その成果のもとに、A、B、C……校などの中心メンバー十数名を組織的に動員したのである。

これは、文字通り、教育秩序に反乱する革命的高校生の大衆的な結節点としてあったし、今後、京浜地区に大衆的組織をもって、大胆に登場するための第一歩でもあったのだ。

さらに、それは単なる高校戦線個別の問題としてではなく、今後さらに大衆的に工場工作者を創出していくために、高校闘争と工場闘争とを運動的にも、組織的にも結合させていくための第一歩でもあったのだ。

したがって、われわれは、そうした意義のもと、京浜地区行動委連合の労働者を動員し、総力をあげて、シンポジウムの成功につとめたのだ。

報告と討論の内容

まず、司会者の方から、「六九年高校全共闘運動の敗北以降、中教審政策等の名のもとに教育秩序強化・再編がなしくずし的にされようとしている中で、われわれ高校生が、いかにそれに対決していくのか？それを単なる高校個別の問題としてではなく、階級闘争との関わりをふまえながら、この場において、徹底的に討論していきたい」というシンポジウムの位置づけがなされた。

つづいて、その視点から第一報告として「ブルジョア社会における教育の機能」が実行委より報告された。

そこでは、ブルジョア社会において教育が、第一に労働力商品をつくり出していくこと、第二にそれを差別、振り分けながら生み出していくこと、すなわち労働者・人民の「階層振り分け機構」としてあることが明らかにされた。

そして、その中でとりわけ高校教育が、〈受験教育—管理者育成機構〉〈職業教育—現場労働者育成機構〉という二つを軸に、文字通りの資本の一大プール＝労働者予備軍プールとなっていることが強調されたのだ。

さらに、その機能を具体的に果たしている日常的サイクルとして教育秩序＝授業・試験秩序がありそれを維持、執行していく末端管理者として、「教師」が位置づけられていることも明らかにされたのだ。

つづいて第二報告として以上の教育秩序を確認した上で、現段階において、高校生に何が問われてるのか、いかなる闘いを構築していかねばならないかということが「工場占拠闘争に向けた高校生運動の任務」という形で出された。

そこでは、まず、真に革命的な高校生運動とは、日常、高校生大衆を支配、包摂している教育秩序—授業—、試験秩序を断固マヒさせていくこと、これ以外の何ものでもないことが明らかにされると同時に、この闘いをさけて、単に「沖縄、反戦」をさけぶ新左翼諸党派の運動が現実には日和見主義であり、われわれ行動委運動の前進にとって障害物とさえなっていることが明らかにされたのだ。

それは、真に「沖縄・アジア人民に連帯する」ということは、自らが支配されていく教育秩序をうち破るところ以外にないということを意味している。

次に、教育秩序への闘いの基本的戦術としての授業における教師追及—ゲリラ団交の意義、すなわちブルジョア教育、教師の位置そのものを暴露していくことであることが明確にされ、これをもって日常的に敵のイニシアチブで回転している秩序を、我々のイニシアチブによって、マヒさせていくこと。

そのもとに全大衆を結集、組織化していくことが行動委運動の基本的パターンであることが、明らかにされた。

また、以上の闘いを担う「行動委」が柔軟に戦術を駆使しうる質をもち、それでもって目的意識的に闘争を進めていくことこそが問われていると強調された。

次に、六九年闘争の敗北からくる教訓として、こうした闘いのにつめが、当然にも国家権力との対決になること。したがって、そのまま正面対決したならば、それは孤立—玉砕へとつながることが強調され、国家権力打倒なくして、教育秩序解体の最終的勝利はないことが確認されたのだ。

そこで、そうした点をのりこえ国家権力打倒の展望として、工場占拠—二重権力—武装蜂起が真正面から打ち出され、もはや高校生運動そのものを自己完結的にさせることは無意味であるばかりでなく反動的でさえあること。その意味で、高校生運動を権力闘争の一環として位置づけねばならないことが強調された。

そして、全ての高校生にとって問われていることは、第一に教育秩序への対決に決起していくことさらに第二に、それを工場闘争を担う工作者をつくり出す運動へと高めていくことが明らかにされたのだ。

つづいて、第三報告として「世界情勢の転換と日本帝国主義」の講演があり、昨年のニクソン声明以降日帝の危機が深まりつつあること、それは当然にも、労働者階級の犠牲の転化として、具体的には産業再編成、労働力再編成という名の大合理化攻撃として現われることが明らかにされ、今後「工場闘争」が高揚すると同時に、逆にこの闘いの勝利なくして、権力打倒の勝利はないことが強調されたのだ。

さて以上、三つの基調報告が出されたのち、質問、討論に入っていった。

討論においては、現実に授業秩序マヒ闘争を勝ちとってきた高校の仲間から、「われわれは、言論・出版問題を媒介として授業における教師追及—授業マヒを闘かってきたわけだが、その中で教師、学校当局の態度が、一定程度大衆

（二面へつづく）

不動の職場拠点を構築せよ！

工作陣型から工場闘争の一大潮流へ！

―南部の電気工場より―

南部電機工作戦線は一年余の工作期間に全力を集中して地域的陣型構築を行なってきた。それは南部―川崎を貫く、内陸部に集中する電機工場が、臨海部の石油鉄鋼と並んで、京浜工場地域の主要な部門であること、又労働力の包合率が南部―川崎においてトップを占めることからして、南部民間戦線の主力となることは間違いない。

我々はこうした地域重点産業部門の攻略を軸とし、多様な闘争形態の結合の上に、真の革命潮流の形成を着実に前進させている。

まず、陣型の上から言うなら、中心部を太田地区に星のごとく散在する電機中小企業戦線に置き、その連係に、品川、大崎地区のソニー・沖電気を中心とした、やはり中小企業群の密集点での闘いの連係作業と、その周囲をとりまく形で点在する大企業群―多摩川辺を第一地域、川崎―南部の海辺部を第二地域、田町―新橋海辺部を第三地域と設定した。

大企業第一地域には日電、富士通、日交、東芝、第二地域には富士電、東芝、松下、第三地域には東芝、沖電、松下、ソニー等が点在する。この中で、第一地域における三戦線、第三地域における一戦線を潜在勢力とし、深い秘密裡の潜行戦に入っている。この潜在勢力に対し、太田―大崎地域に無数に密集する中小企業での大胆なる制圧戦の展開は、とりわけ中企業O・P電機、小企業M電機を中心として、表面化した闘いは、潮流化運動のまさに主勢力と呼びうるだろう。

又、闘争形態の上では、P電機における不当政治的処分攻撃に対し、徹底した情宣活動と、闘争の地域化を駅頭、門前、他工場ビラ入れを通した統一戦線の広範な形成をもってなし、その社会的な運動としての表現を勝ちとりつつある。

又、O電機における合理化―ラインスピードアップ―職業病の多発傾向に対しては、工場内部におけるラインをめぐる攻防→ラインの先頭の者が意図的に職制の言うとおり、めちゃくちゃなスピードで物を流し、それが限界に達し、ライン労働者に怒りが充満するころをみはからって、中間で「たまり」を激発する。その「たまり」をめぐる職制との口ゲバにのってラインをストップするという、ゲリラ的闘争と、工場全体に対する職業病認定をめぐる徹底した正面対決のコンビネーションからの闘争表現がある。

そして、M電機においては、職場移転に対して勝利的に闘い抜いた後、職場内において工作者による一部門の完全な制圧（N部門とする）がなされた。N部門においては、工作者に対し暴力的に敵対してくる右翼労働者がいたが、ある問題をめぐって、工作者が完全に優位性を持ち、その労働者が他の部門に自ら移っていくことによって、N部門の職場には完全に工作者のヘゲモニーがうちたてられた。若手層のほとんどは工作者に連帯し、生産調整を勝手に行い、休み時間になると、十数名が自然に集まってきて、秩序派はすみの方に小さくなっているという状態が作り出された。又、非現業部門においては、別の工作者によって完全に職場のムードが作り変えられつつある。例えばその部門は非現業というところからエリート感を持たされ、現場に対しては一段高いところにあるようにふるまっていたのだが、工作者が一人で現場に入って仕事を始め、そんな机の上で楽な仕事よりも、現場に入って、少しでも現場の手助けをしたいという主張が、最初は皆の反発を受けていたが、工作者の一貫した態度によって少しづつ変化し一人二人とひまな時には現場に入るようになった。そしてついにある日、その部門の労働者が全員現場に入っているのを見て激怒した課長が、「君らはそんな仕事をしなくってもいいんだ」というと、一人の労働者が「いや私はひまだし、この仕事がすきだからやっているんだ」と平然として言ってのけるまでになった。こうしたことを通して、現場―検査―工程―営業のわくは序々にとりはらわれ昼休みに反戦歌などを歌い、秩序派からおそれられる二〇名ほどの集団になっていった。

一方寮においては、寮長をはじめとする三名ほどの秩序派以外には、工作者を中心とする反資本的グループへまるごと移行しつつある。寮内の三名ほどの秩序派は寮に居ずらいせいか、連日外出し寮内はまさに解放区的存在にまでなりつつある。そこでは寮機関誌、寮会を中心とした深い結合、軸をしぼった五～六名の寮フラク、〇名の工作者を含めた指導フラクという整然とした組織形態へ進みつつある。

こうした各工場での闘いはP電機の地域規模での公然闘争と結合し、又大企業S電での工作に活力を流し込み、一すじの赤い炎として南部の天空をこがし、燎原の火のごとく地域に拡大するであろう

南部の全工場、職場に闘いの炎を燃せ！

高まる組合官僚不信の声

―A病院より―

六月×日、会場は時間外大会にもかかわらず、緊迫したムードと会場からあふれて立ちつくす異常な労働者の結集がみられた。特に若い看護婦、そして「病院」というイメージから一般にかけはなれた存在の末端の現場労働者が、多数参加していたことが目立った。

ところで、われわれ、A、B、C職場は会場の前方を陣取った。組合執行部は会場の陣形、大衆の参加状況を判断して、あわてて議長の変更を行なったり、また、来賓に執行部の最上層を呼ぶなど、慎重で、弱腰の態度がありありとうかがわれた。

大会は、おきまりの開会宣言、短い来賓のあいさつが終り、経過報告がひきつづきダラダラ二十分間おこなわれている際中に、B職場から「質問はさせないのか」と声があがる。議長はその提案をうけて、途中に質疑応答の時間を設ける。この確認をしなければ、経過報告から運動方針案採択まで、いっきょに進行させられてしまう状態であった。

議長―（しかたなく）「質問ありませんか」。

B職場労働者―「A職場の組合不信（組合費納入拒否、組合の指令行動ボイコット等）の問題に関して、経過説明と組合の態度を示してほしい」。その他に、A職場から会計の不明朗、組合費の使途について説明せよとの質問があびせられた。

B職場が質問したA職場の組合不信の問題は、こうである。

A職場労働者の全員が切実に求めている労働条件改善の要求を、執行部がきちんとした理由もなく「お前たちは身勝手である」「要求を通すことは無理である」として圧殺し、さらに「そんな小さな要求よりも春闘の方が重要だ、忙しくて忙しくて」といい、これに反発してA職場は組合不信の声をあげ、組合費の納入拒否、指令動員命令ボイコット等をひきおこしていた。そして執行部は非を認めず、いろいろな形でA職場の中傷、デマ、おどしを加えてきており、六月十日のこの大会では、この問題の結着が問われていたのであった。

組合執行部とA職場の対決という事態が、実は末端職場労働者をはじめとし大衆の大衆結集をもたらした主因であり、また、大衆の組合官僚不信に対する関心の高まりでもあった。

では、この結着はどのように行なわれたか。

これはA職場が執行部の抽象的な答弁にまどわされ、攻撃のチャンスを見失なったことで、非常に残念であったが失敗した。

大会ではその後、運動方針案について様々の形での組合不信、たとえば保育施設の建設要求に力を入れない理由は何かとか、変則勤務体制をどうするかとか、組合はぼう大な議案書に書かれた要求項目を全部取りくむのか、等々が大衆から投げつけられ、A職場の追及が失敗した不満が、ちがった形で発せられた。

大会は、閉会宣言を述べて終った。

大会後A、B、C職場の中心部分で総括会議が行なわれた。そして、われわれは、今回の失敗の中から、次のような教訓を皆で確認した。

①、A職場問題の結着に関しての失敗は、たんにA職場の活動家の技術的ミス、消極性にあったのではなく、大会以前に事前に現場の中心メンバーが組織的準備をしていなかったからで、次回からは、この準備を必ずやろう。

②、組合不信の大衆的エネルギーをも過少評価しすぎた情勢判断の甘さがあった。

③、そのため様々な大衆の組合不信を爆発させきって、独自の連合戦線をつくりえなかったことが、われわれの最大の失敗であった。

④、当のA職場では、今後、労働条件など独自要求、独自闘争、それをとおして、組合執行部に対抗しうる独自の運動実体が課題である―等々。

大会後も組合執行部は、A職場に種々の切りくずし、「第二組合」というデマを流しているが、われわれはこの間の失敗を正しく総括し、日常活動を点検し、かれらとの闘争を続けてゆくかもりである。

日増しに強まる合理化攻撃

―T自動車部品工場より―

わたしたちの働いている工場は自動車産業の関連下請部品工業の中規模程度のシートメーカーである。

従業員数約二〇〇〇（組合員数一二〇〇）で周辺に密集している下請部品工業の工場団地の中でもひときわ目をひく存在である。

工場は二棟からなっている。バネ製造、フレーム組立、シート組立、塗装、縫製という一貫したシートの流れ作業工場である。

この流れ作業は、それぞれ内容の性格の異なった作業の結合であるが、それらを流れ作業システムとして完成させるために、各製造過程をコンピューターの導入で一元的に管理支配するようになっている。

労働組合は、自動車労連の一翼民間統合労組（通称民労）で、組合員数一二〇〇であり、民労の中でも大きく、指導的、中心的存在となっている。

今年の賃闘は四月の初めから開始された。しかし、この賃闘をはさんでいる全体の流れを見るほうが賃闘の意味もはっきりする。

すなわち、昨年の賃闘において展開した七五〇〇円クギづけからMIC組織が経協活動として開始したのが十月、そして、企業内の再編に具体的に着手したのが二月一日、これからIE、MICによる間接部門人員の五〇％削減と、時間管理、工程管理、労働強化の開始が進み、四月賃闘、一時金一括妥結、五月から経協月間、八月に出来高給の導入をしたいとすすんできているのである。

〈賃闘経過〉

四月初めからの数日間の職場会をもって賃闘が始まった。この賃闘の期間を通しての大きな特徴は民労T・S支部の狂気の大カンパニアであった。まず「要求貫徹」の赤バッヂを組合員全員に配布した。そして職場会の職場討論のあとの連日の労働歌合唱の練習（自動車労連歌、〝俺達の心は何時も夜明だ〟〝頑張ろう〟）職場委員を中心にして、全員スクラムを組んでの練習。続いて第一回団交前の賃闘総決起集会の開催。この集会においての組合委員長、副委員長、また職場代表の発言（不況下の賃闘で非常に困難であるが、賃上げ要求の内容は検討に検討を重ねた結果出したものであるから、絶対獲得するとの強い決意表明のカンパニア）。またこの集会での発言の内容及び民労本部からの激励のメッセージを書いたタテカン。

第一回団交後の報告集会の開催。ここにおいても組合役員一同が壇上でスクラムを組んでのしつこいまでの労働歌合唱の繰返えし等々

民労T・S支部の特殊な性格として一定程度の闘う姿勢を演出せざるをえないという事情があるにしても、組合幹部の今年の賃闘期間にみせた一連の動きは、例年になく異常であった。それは組合幹部の危機感のあらわれにほかならなかった。しかし、この賃闘期間中の組合の鳴物入りのカンパニアに一貫して無関心の一群の青年労働者が存在しつづけた。それこそダイナミックに進行する合理化にふれもせずにおこなわれる賃闘がその隠ペイ策としての組合主義的集約であることを暴露しているのだ

〈経協月間〉

どんな合理化がおこなわれているのか？

一月一ぱいの賃闘のあと約一ヵ月の小康期間を経て、五月二二日から経営協議会活動が始まった。職場会を通して経営協議会活動の意義が説かれ組合員全員が一致団結して生産性向上運動に協力するよう要請があった。そしてこんどは賃闘期間中のバッヂ―中味を「要求貫徹」から「生産性向上」と変えただけの同じ大きさのバッヂ―が組合員全員に配布された。これと同時にMIC標語と並行して募集された経協活動に関する標語の入選作（「ムダ一つみんなで省いて高生産」「仲間で磨った相言葉、経協強化で生活向上」「付加価値高めて労使で笑顔」「伸ばせ生産、仲間の中と英知から」）が組合掲示板にはられた。このような経協月間のスケジュールの中で職場のしめつけ攻撃、支配強化の動きが表面化して来ている。具体的な例をあげると②定時離着席の厳守（ベルのなる前に必ず手袋、前かけを着用し、ベルがなったらすぐ仕事に着手する。またベルが鳴ってから仕事をやめる等）②ラヂオ体操の毎朝の励行（いままではやらなくても何ともいわれなかった）③定時後からの手洗いの厳守、④職場の整理整頓、等がうるさくいわれ出してきている。特に手洗いにおいては今までは職場の既得権として一日の生産の指示が終われば、ベルの鳴る前でも自由に仕事から離れて手洗いをすることができたが経協月間を通してその既得権が奪われ、ひどい職場となると、課長クラスの職制が定時近くになると屋上に上がり、そこから誰が最初に手洗場にくるか見張っているという具合だ。また、QC活動の一環としての職場懇談会と称して、月に一度か二度職場全体で指示を軽くし、残った時間を利用して班長、作業長、課長クラスの職制と胸を開いて話をしょうということが行なわれている。純粋QCイメージから―作業の改善、やりたくない、またはやりにくい作業はないか等―、ある職場においては、他の工場を見学し、よい点、自分の職場より「進んでいる点」を一人一人に発言させ、自分がいったのだから自分の職場でもそのように行なう、口を開かないとおこられ、開くと労働強化されるというやりかただ！

〈MIC〉

経協月間を通しての支配秩序強化の動きと不可分にMIC合理化が進行している。T・SにおけるMIC合理化はMICマネジメント・オブ・インダストリアル・コートと呼ばれ、間接部門（事務、技術、計画、統計等の現場部門の上にそびえたつ支配機構）の経営効率化簡素化計画として始められた。一年前からの開始以来、本年四月までに間接部門の人員削減を行い、間接部門（七〇〇人中約半数にまで減らし、減らされた半分の人員のうち、五〇％を現場部門に割り当て、残りの五〇％をMIC担当、IE担当、開発部門の設置等の新たな部門設置にわり当てている。本年にはいってからIE（インダストリアル・エンジニアリング）を軸として現場における種々の動作研究、作業研究をつみかさねていった。

この動きにみられるようにMIC合理化は間接部門の人員削減の合理化からIEを軸として現場部門の合理化に着手しているというのが今年にはいってからのおもな動きであった。そして、賃闘のカンパニア、経協月間の支配強化、しめつけ攻撃をともないながらIEの成果を踏まえつつ、五月末から六月にかけて合理化の動きがいっそう本格化しつつある。

まず、溶接、プレス部門における、レイアウト、省力化が大規模に行なわれている。また全工場的に、特にバネ製造、シート組立部門において、効率化低減の合理化、労働強化が進んでいる。シート組立部門においては、各班ごとに目標達成値を明示し、これを絶対上まわらないよう一日ごとにその日の効率をグラフに書きこむ作業が各班長に課せられている。効率化低減のため、バネ補給の時間短縮、段取り時間等の短縮が叫ばれている。そしてこのような合理化の行く手にはさらに七～八月からの能率給導入が待ちかまえているのだ。

米ソ対抗下の平和の危機と米ソ首脳会談

二月の米中首脳会談につづいて、五月末米ソ首脳会談―「暗く卑劣な首脳会談」（ハノイ放送）―がおこなわれた。米中首脳会談のときをはるかに凌ぐはげしいインドシナの砲爆撃を伴奏としてだ。そして共同声明と基本文書に出てきたのは、またしても「平和共存」だった。七一年夏アメリカ帝国主義が戦後世界の根本条件となっていたその世界政策を政治的軍事的にも経済的にも修正転換して以来、そしてそれによって世界危機をあらたな段階にすすめて以来、外交はまさに花盛りだ。入り組んだ外交交渉がつぎからつぎとおこなわれた。そしてそれらの頂点となったのが、米ソ首脳会談にほかならない。これは何を意味するか？インドシナ革命へ、さらには日本革命へ何をもたらすだろうか？

一、米ソ両超大国の狙い

今回の米ソ首脳会談は、かつてのそれとは根本的に異なった世界情勢のもとに、異なった目的をもって開かれた。

かって、アイゼンハワーとフルシチョフは、すでにしっかりと確立された「米ソ対抗下の平和」のもとでそれを確認し、米ソ「平和共存」によってその現状維持を不動のものとするために一堂に会した。だから掛値なしの自信と微笑が両者に流れていた。しかし、今回、ニクソンとブレジネフは、「米ソ対抗下の平和」の破綻と崩壊のはじまりに直面し、それを懸命にとりつくろうために一堂に会した。だからこそ、彼らの顔に浮かべた自信と微笑には深刻な苦悩のかげりが宿っていたのだ。

インドシナ革命戦争に打ち破られた「史上最大最強の」アメリカ帝国主義は、もはやその世界政策――ソ連封じこめのうえに成立させた「米ソ対抗下の平和」の米ソ平和共存による現状維持と、それを破ろうとる者は孤立させ、徹底的にたたくことを「アメリカの安全」のための第一義的方針とする世界政策―をつづけることはできなかった。

そこでニクソンはあらためて国内優先を打ち出しつつ、世界政策については「退きながらの現状維持」、つまり米ソ平和共存を前提としながら、インドシナ革命とその背後の中国に一定の譲歩をおこなって、何とか和解と平和共存にもちこもうという転換を打ち出した。米中首脳会談と「米中平和共存」の確認こそその決定的な第一歩にほかならなかった。

だが、同時に、インドシナ革命戦争の勝利の進撃は、「文化大革命」に登りつめた中国過渡期社会の総路線をめぐる階級闘争とともに、擬制の革命に紛うことなき真の革命を対置することによってソ連の世界政策――擬制の世界共産主義運動と現実の米ソ平和共存による現状維持――をも破綻に追いこんだ。インドシナ革命の無言の批判と中国のはげしい「修正主義」「社会帝国主義」批判は、世界共産主義運動の指導部としての威信を地に堕としてしまった。それがソ連共産党にとって深刻な国内の労働者人民の統合の危機を意味することはいうまでもない

そこでブレジネフらは、米ソ平和共存を堅持しながら「ただアメリカが退くのには抜け目なく権力政治的につけ入りながら、あらたに威信失墜の根源、中国の包囲へとその世界政策をしだいに修正転換してきた。中ソ国境への大軍の集結、ベンガル戦争におけるインド支援、ヴェトナム援助の急激な増額、そしてインド洋東支那海へのソ連艦隊の進出などがその方向への一連の方策であった。

ところで、こうしてたがいにおのれの世界政策の破綻によって陣営内の指導力を低下させたばかりか、国内政治危機に直面した、米ソ両超大国は、当然にも、双方とも対中、対インドシナ政策を軸に修正転換したその世界政策の遂行の見地から、「米ソ対抗下の平和」と米ソ平和共存の大前提を再確認するとともに、あらたな情勢に応じて若干の調整をおこなう必要に迫られたのである。

そしてこうした基本的課題に、アメリカ側にはニクソン再選、ソ連側にはブレジネフの党指導部における地位強化という特殊な課題が賭けられていた。

二、何を合意し、何を合意しえなかったか？

では、米ソ両国はこの首脳会談で何を合意し、何を合意しえなかったか？

この米ソ首脳会談の形式上の「成功」はいわば予め保証されていた。米ソ戦略兵器制限交渉をはじめとする一連の予備交渉の総仕上げとして、この首脳会談が演出されたからである。

さて、米ソ両国が取引合意した最大の目玉商品は、いうまでもなく、ABM（ミサイル迎撃ミサイル）制限条約、戦略攻撃兵器制限協定であった。

両国は共同声明で、これを「軍拡競争を抑制し、それに終止符を打つための大きな一歩」「核戦争発生の脅威から人類を救うための第一歩」（!?）と臆面もなく吹いている。

だが、それは真赤な嘘だ。

この条約と協定は戦略兵器の数を制限しただけである。だからかつての部分核停条約同様、軍拡競争をあらたに戦略兵器の質の競争に移しかえるにすぎない。しかも、これらは同時に、軍縮の名のもとに、部分核停条約同様、他の核大国に対する優位の凍結をも狙っているのだ。

戦略兵器制限交渉の美わしき合意の真の政治的意義は、米ソ平和共存こそ不動の基礎であることを全世界に誇示すると同時に、「第二撃能力」などという理論によって無限にふくらむ傾向をもって無駄な重荷となっていた財政負担を、量の制限によって直接軽減するばかりか、いっそう大きな重荷となっていたヨーロッパ防衛費を、「全欧安保」へ前進し、ヨーロッパの冷戦を緩和することによって間接的に節約するところにある。

米ソ両国にとって、ヨーロッパこそが第二次世界大戦の第一正面であり、その戦後処理の、したがってまた戦後世界体制――「米ソ対抗下の平和」――の第一正面であった。だが、あらたな世界危機と階級闘争の第一正面は、アジアであり、したがってまたアジア――インドシナ中国政策を軸にその世界政策の修正転換をはかろうとしている米ソ両国は、他方面での出費をできるだけ削ってその分あらたな対応へふり向けようとしている。米ソ間の戦略兵器制限交渉の合意は、ベルリン、ポーランド国境問題の処理につづくヨーロッパの冷戦緩和の第二弾なのだ。

だが、米ソ両国はかんじんのインドシナ問題では合意に達しえなかった。

共同声明でも基本文書でも、ヴェトナムはタブーのようにふれられなかった。アメリカ帝国主義は、米中会談と、機雷敷設でぎりぎりの圧力をかけ、「大国の責任」の強調からソ連のヴェトナム援助抑制による取引による戦争終結へのもちこみを狙ったにもかかわらずである。ソ連修正主義は、少なくとも表向きには、「他の国連安全保障理事会常任理事国と同様の」緊張緩和の責任しか引き受けなかった。この二つの超大国が小国の革命を公然と取引することはもはや永久に不可能になってしまったといってよかろう。

しかも、もう一つの目玉商品と考えられていた米ソ通商拡大さえ、伝えられるところでは、アメリカがソ連をインドシナ戦争終結の取引に釣る餌として使ったために、十分な合意をみず、さしあたり合同委員会設置だけに終った。

三、アジア、日本の革命に何をもたらすか？

とすると、米ソ首脳会談は、アジアと日本の革命に何をもたらすだろうか？

最初に指摘したように、米ソ両国の主要な狙いは、ほころびはじめた「米ソ対抗下の平和」をいかにとりつくろい、現状を維持するかにある。その角度から、共同文書の「米ソ両国は、両国間の関係を危険なまでに悪化させるような情勢の発展防止をとくに重要とみなす」以下の一節に注目しなければならない。「双方は、直接的であると間接的であるとを問わず、一方の犠牲のもとに一方的利益を得ようと努めることは、これらの諸目的と両立しえないことを確認する……」

これは明らかに、これまで同様緊張緩和を最優位に置いて、革命戦争の抑制をも要求する主張以外の何物でもない。はっきりした合意がなかったとはいえ油断はならない。ことに、ソ連修正主義の包囲圧力とアメリカ帝国主義の誘いによって中国が対外政策の姿勢を崩しているだけに、そしてソ連修正主義がヴェトナム解放勢力の対中不信につけこんで援助の主力となり、影響力を増しているだけに、米ソの取引策動の条件は拡大しているからだ。

現に、ポドゴルヌイ議長がハノイを、キッシンジャー補佐官が北京を訪問して、ヴェトナムの取引による打開工作に両者とも血道をあげているかにみえる。ヴェトナム労働党はポドゴルヌイに対して不快の色を隠さず、また帰米したキッシンジャーは「北爆強化、機雷敷設のもとでも米中関係改善はすすみうることを確認したのが成果」と発表している。そしてニクソンの新和平案の発表も間近いといわれる。

だが、米ソ共謀の隠れた取引策動は、インドシナ解放勢力のますます固い決意のまえには、けっしてけっして成功しえないだろう。

鍵を握るのは軍事情勢である。インドシナ革命はこうしていまや、取引策動を排し、あらたに解放した地域を維持して雨期をもちこたえ、大統領選までに再度の攻勢に出たうえでのパリ会談――それはアメリカ軍の全面撤退とばあいによってはニクソンの大統領敗北、さらにはタカ派を抑えてニクソンを迎えたブレジネフの立場の悪化などをもたらすだろう――へ持ちこめるかどうかの重大な局面に差しかかっている。

米ソ首脳会談の当面の日本帝国主義の階級情勢に対する直接の影響としては、日ソ平和共存関係の急速な進展の可能性が出てきたことを挙げねばなるまい。

なぜなら、ソ連修正主義が日本帝国主義の対中接近を牽制しみずからの対中包囲の一環に組みこむ遠大な目的から、ますます日本帝国主義への働きかけを強め、資本主義世界の危機の深まりのなかで資源をもたぬ巨大な生産力をかかえて孤立化傾向に脅える日本帝国主義もまたいまや、アメリカ帝国主義にまたも先を越されぬよう、とくにシベリアの資源開発に向かって、飛びつこうとしているからだ。

中国からの働きかけも重なって、財界が中ソに対して等距離をたもった接近へと動いているばかりか、こうした見通しは社公民の既成の議会主義野党に棚ぼたの利益を与えて活気づけている。アメリカ世界政策の修正転換によって不動の支柱を失って麻痺した自民党政権にかわりあらたな階級的激突の露払いとなる公算の大な中道政権が登場しうる条件が一つまた一つと準備されつつあるとみなければなるまい。

だが、また、米ソ首脳会談の日本帝国主義の階級情勢に与えた間接的影響としては、インドシナ革命についての取引策動の成否如何が、きわめて大きな影響を及ぼすであろうことはいうまでもない。

取引策動の失敗とアメリカの海空からのコンベア方式といわれる非人間的な砲爆撃の持続拡大は、対外政策をまったくマヒさせたままの日本帝国主義の新政府と支配階級の思惑如何にかかわらず補給出撃基地化、侵略加担を事実としておしすすめ、労働者、学生大衆の憤激と抗議の波をふたたび高めずにはいないだろう。

（文責　山川媒煙）

（一面からのつづき）

的に明らかにされたと同時に、クラス内の流動化―分解を通じて教師追及部隊が登場してきている」という報告が力づよくなされた。

さらに、それを基軸として、教育秩序への対決こそが真の高校生運動であることが確認されると同時に、それへの関わりからくる工場闘争・国家権力打倒等についての討論や質問がなされ、高校生運動と工場闘争との関わりが一定程度、明確にされていったのだ。

そこで、われわれは主要な討論点・質問点を再度ここに明確にしていきたいと思う。

まず高校生運動を「教育闘争」という文化的思考でとらえた質問について。

これは、革マルに代表される運動論で、要するに教育政策反対闘争という体制内闘争にすぎないことを明確にする必要があろう。

特に、こうした諸君は、全共闘運動がさし示した意義―ブルジョア教育秩序そのものへの真正面からの反乱であった―を何ら明確に出来ないばかりか、逆にそれを「はみ出し運動」という批判にならぬ批判で自己保身におちいっているのだ。

我々はもちろんブルジョア教育秩序解体によって教育と労働の結合を展望していくわけだが、それは、現実の闘いの蓄積の中からしか生み出されてこないことを明らかにした。

また、もう一つの質問で、工場占拠闘争の可能性について、「現実に可能なのか」ということがあった。

これは、すでに「前衛」紙上においてわれわれが述べてきたように、第一に客観的条件として、日帝の危機―国内合理化攻撃によって、工場闘争高揚の条件が成熟しつつあること

第二に、主体的条件として、いまだ浮上しえてないが、現実にこれをめざした闘争があるし、さらに今後これを拡大していかなければ、勝利の道がないことを確認する必要があろう。

その意味で、今後高校生をはじめとした工場工作者による闘争の蓄積、戦術の開発が問われているのだ。

高校戦線の指導部の確立へ

さて、われわれは、6・18シンポジウムをふまえて、今後の方針を明らかにせねばならない。

それは、教育秩序への対決を基軸とした高校闘争の爆発をおし進めると同時に、それを横に結合させ、文字通り、京浜地区における高校生運動の指導部として登場していくことである。

とりわけ、われわれは、プロレタリア本隊の予備軍たる工業、商業高校の学友の前に大衆的に登場し、それを基軸とした行動委運動へと飛躍していくだろう。

そのために、現在われわれは、京浜地区を三つのブロックに分け組織的な整備をはかりつつ、それを集約するような指導部を確立しつつある。

また一方において、そうした高校生運動の展開、機構化にあわせて、工場闘争と結合させていくことが問われている。

われわれは、昨年から、労働者との結合を深めて工場工作者をつくり出してきた。このことをふまえ、われわれは今後さらに大衆的なものにしてゆくためにも、早急に従来残っていた手工業性から脱却することが必要なのだ。

したがって、われわれは、この夏を最大限有効に利用して高校と工場との組織的な結合でもって、労働者を主体とした工作者づくりを展開していくし、そのための労働者の側の、高校生を組織しうる質と体制を獲得していくことが、最大の課題としてあるのだ。

全ての高校生は、京浜地区行動委連合高校戦線のもと反乱をもって結集し、大衆的な高校生の共闘組織を建設しようではないか！

工場工作者
「工場工作者」編集グループ

街頭実力闘争がゆきづまってからすでに久しい。街頭の勇士たちはどこへ消えてしまったのか？じつに多くの勇士たちが展望を失い、消耗し、くだをまきながら体制へ舞いもどった。
だが、最良の勇士たちはじつは工場へ入ったのだ。資本の城塞―工場のなかに、労働者大衆とともに、革命の不抜の拠点をつくりあげるために。
われわれは、こうしてまさに革命闘争の最前線に立って不屈の闘いをすすめる工場工作者の息吹きを、そしてたたかいの雄叫びを、ぜひとも諸君に伝えたい。
（『はじめに』より）

□工場工作　工場・職場に地下組織・大衆組織を組織してゆく生きた戦術を明らかにしている。（自動車・電機工場・全逓）
□工場日記　地方から東京へ出てきた一青年労働者の工場生活の記録
□工場闘争　日本電気KK下請工場の闘い他三編
□工場観察　工場工作のために要求される工場・職場の支配関係の具体的分析、他三編

定価　三百五十円

労働者権力　第九号
京浜地区行動委連合

□京浜工業地帯の特徴とわれわれの任務
□自動車戦線における行動委建設
□大学・高校戦線の戦略的任務　その他
□行動委連合の戦略的任務　その他

定価百円
前衛社・『前衛』取扱い書店にて発売中

公判日程七～八月

7月21日（金）午後一時より
東京地裁七〇二号法廷
明学大三・一七ロック・アウシュヴィッツ体制粉砕闘争
第一三回公判弁護側冒頭陳述

8月21日（日）午後一時より
横浜地裁特号法廷
東海大一〇・五～八ロックアウシュヴィッツ体制粉砕闘争第一一回検事証人調べ